日本義肢装具史　（その2）

鈴木祐一とその著書「義手足纂論」

川村　一郎

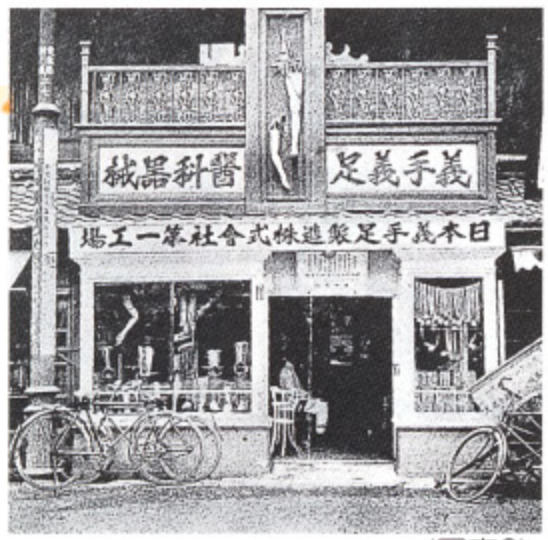
義足者　　（写真1）

鈴木祐一(明治5年(1872)ー大正10年(1921))は、彼自身下腿切断者であり義足装着者であったが、現存する日本義手足製造株式会社の創設者の１人として、又明治35年(1902)発刊のその著「義手足纂論」の著者としても忘れることのできない人である。(写真1)

鈴木祐一は明治5年(1872)に静岡県榛原郡に生まれた。鈴木家は茶・椎茸・山葵の販売を家業としていた。祐一は明治21年(~~1902~~1888)4月、運動会で右足関節を捻挫したが後に右内果の下部に発赤腫張をきたし、長期にわたり経過がはかばかしくなかった。多分、結核性足関節炎であったと思われる。明治27年(1908)7月東京順天堂医院で佐藤進により右下腿3分の1の切断を受けた。初めての義足は浅草蔵前の義足師遠州屋石代重兵衛に製作してもらったが、断端と摩擦する箇所があり、また重量が重く窮屈で到底使用に耐えるものでなく、義足ではまともな人生を送ることができないと世を儚んで先祖から譲り受けた財産の在り得る限りをを消費し、奢侈と堕落を極める生活をしていた。しかし、たまたま浅草公園に見世物見物に行ったとき一少年が両足踵に30ｃｍばかりの竹棒を結びつけ身体を支持して巧みに芸をするのを見て、一念発起し自分も練習を積めば義足を使いこなせるとの結論を得た。祐一はこの年故郷静岡に帰ったが、家の商売を番頭に任せ義足の研究に没頭することになった。この話を伝え聞いて、当時東京で義手足製造所を開設していた小柳六之輔、小柳春吉兄弟のうち小柳春吉が静岡に鈴木祐一を訪ね、共に義肢の装具研究・製造販売をしようということになり、祐一は大正7年(1918)日本義手足製造株式会社の設立と共にその専務取締役兼工場監督研究部長の職位につく。

(鈴木祐一の名刺：写真2)日本義手足製造株式会社は日本を代表する義肢製作所の１つとして今も東京で健在である。(当時の工場社屋：写真3)

（写真2）



（写真3）

鈴木祐一は義足装着者として訓練により多くの可能性に挑戦し、自分の体験や知識を世間の切断者に知らせ、役立てたいという意志を強く持っていた。その現われとして祐一の行った富士登山は特筆されるべきであろう。明治35年8月、数名の切断者と共に富士登山を決行しそれに成功している。(写真4)彼はまた当時切断者が参考にするべき義手足に関する書籍が全く無いことに注目し、自分の体験に基づいて「義手足纂論」を明治35年(1902)に上梓した。この本は我が国で最初に出版された義肢に関する単行本であるが、同様の書物はこれから昭和18年(1943)の保利清著「義肢に血の通ふまで」(写真5)まで実に41年も後のこととなる。このことは日本において切断や義足に関する一般の関心がそれだけ薄かったことを物語っている。この両書に共通していることはいずれも医学書でも工学書なく、つまり治療する側の医学人のためのものでもなく同時に製作する側の人達(義肢製作技術者)のためのものでもない。少し極端に論評すれば義足装着者のための精神論とも言うべきものである。それはともかく「義手足纂論」の日本義足史における資料的価値が極めて大きいことに変わりはなく、それは次のような構成になっている。

（写真4）

<目　次>

第壱篇　佐藤軍医総監の義肢談
第弐篇　天機伺並軍人慰問録
第参篇　義手足纂論上梓の趣意
第四篇　鈴木祐一の義足始末
第五篇　切断を躊躇する勿れ
第六篇　切断者は初生児の如し
第七篇　義手足の起原及び沿革
第八篇　義肢製造者の歴史
第九篇　手足切断に係る諸大家の談話
第拾篇　義手足者の実歴談
第拾壱篇　義手足製造販売所紹介表
　　義手足製造者の談話
第拾弐篇　日清戦役と衛生（石黒軍医総監の口授）
第拾三篇　明治十年の役負傷手足切断者氏名表
第拾四篇　雑録
第拾五篇　名士の書翰

（写真5）

このうち第11篇に当時の義手足販売社紹介表として(写真6)のような表が載せられているが、ここに紹介されている11ヶ所は全て医療器機販売業又は医療器機製造業であって、このことは日本の義肢装具製作又は販売のルーツが医療器械にあったことを物語っている。このうち始めに挙げられている石代重兵衛とは鈴木祐一が彼の最初の義足を作った浅草蔵前の義足師遠州屋のことである。「義手足纂論」の文中鈴木祐一自身が述べているように、石代重兵衛の義足は切断者祐一にとって使用に耐えられないものであり、このことが後の祐一義足の製作や装着に対する思い入れの原動力となったことは疑いない。

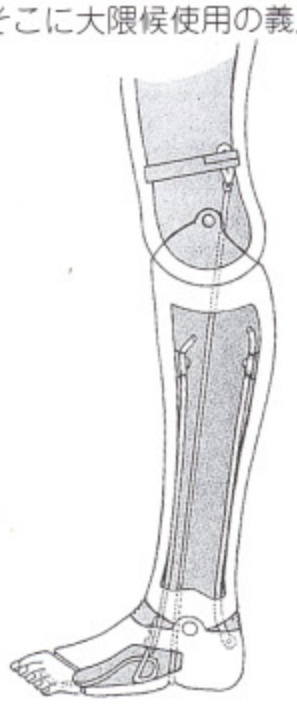
表二　義手足製造販売所紹介表

東京市浅草区蔵前北元町	医科器械販売店	石代重兵衛
同本郷区本郷三丁目	同	萬木九兵衛
同日本橋区本町三丁目	同	松本器械店
同下谷区桜木町	医科器械製造家	小柳六之輔
同下谷区松枝町一丁目	医科器械販売店	職工聯合工場舎
大阪市西区京町堀通二丁目	同	奥村済世館
同東区道修町二丁目	同	白石松之助
同東区平野町	同	大井卜新
静岡県静岡市呉服町五丁目	医科器械製造家	近藤伊作
同静岡市新通三丁目	同	岡本米吉
愛知県名古屋市本町	医科器械販売店	八神幸八

(写真6)

また次に挙げられている萬木九兵衛の店は東京大学赤門附近(文京区本郷3丁目)にあったようで、現在も医療器機店や義肢製作会社の多く集まっている地域である。萬木九兵衛は日清・日露戦争の恩賜の義肢の製作者として名が知られており、第2次世界大戦終了前後までは我が国を代表する義手足製造者であり、明治の大政治家で早稲田大学の創設者でもあった大隈重信の義足を製作した者としても有名であった。大隈重信は明治22年(1889)10月に外務大臣であったとき右翼に狙撃され右脚切断の負傷を負った。切断後彼が最初に装着した義足はアメリカA・マークス社のものであった。大隈候の創設した早稲田大学には大隈候の使用した義足5本が残されており、そのうち3本は米国製で2本は日本製といわれている。どれがマークス社製のものかは判然としないが、この義足はアメリカ義足史上有名なパルマー義足(写真7)の流れを汲んでいるものと思われる。大隈侯の残した義足5本のうち傷みが激しく最もよく使用されていたと思われる義足が1本あるが、それがアメリカ製か日本製か或いは萬木九兵衛の製作したものかはよくわからない。昭和41年(1966)に大隈侯の誕生の地である佐賀県に記念館が設立され、そこに大隈候使用の義足が1本展示されているが、それが5本のうちの1本なのかどうか定かではない。(9)
萬木九兵衛の店は現在は消滅しその名声を知る人も少なくなっている。

小柳六之輔は弟小柳春吉と共に小柳義手足製作所を開設しており、鈴木祐一と共に大正7年に日本義手足製造株式会社を設立したが、昭和初年より脱賜帯の製造販売に専念するようになり、現存しないが日本最初のマスプロマスセールを業界に導入した先駆者として、記憶されなければならない。奥村済世館は大阪を発祥の地としたがその後福岡、岡山、金沢に支店を出し、多くの弟子を輩出して日本民間義肢製作者の一大ルーツとなり、筆者自身もその系統の流れを汲む1人であるが、これについては後に詳しく記述したい。文中“大阪市東区道修町2丁目白石松之助”とあるのは大阪に現存する白井松器械株式会社のことであろう。その前身は享保元年(1716)に白井家が大阪道修町で薬種商を創業したのに始まるが、明治5年(1872)12代白井松之助が医療器械店を開設し、当時の大阪府立病院長及び外国人技師の指導のもと欧米各社と特約の道を開き、医療器械の輸入を開始した。その後刀剣師、鉄砲鍛冶等を指導して、外科器械の国産化に成功する。(10) 文中“白石”となっているのは白井の誤りであると思われる。この白井松器械の義肢装具部門が大正末期か昭和初期に独立し、義肢装具製作所森矯正館として永らく独自の技術を誇っていたが、昭和40年前後に廃業したようである。



(写真7)

このように「義手足纂論」に紹介された義手足販売者はすべて医療器製造所もしくは販売店であったが、実際に義手足を製作したのはそれらの設置者例えば萬木九兵衛ではなくその直属の職人或いは下請職人とも言われる人であったようだが、このことは日本の後の義肢装具の歴史を考えるとき忘れてはならない重要な史実である。

＜参考文献＞

(1) 鈴木 邦雄「50年のあゆみ」
日本義手足製造株式会社，1967年

(2) 鈴木 祐一「義手足纂論」
南江堂，1902年

(3) 武智 秀夫「鈴木祐一とその著書『義手足纂論』」
日本医史学雑誌第23巻第4号，P.444－459，1977年10月

(4) 坪井 良子「富士に登る－ある下腿義足者の挑戦－」
臨床リハビリテーションVol.2，No.7，P.586－587，1933年7月

(5) 坪井 良子「大隈重信候の義足－右脚切断手術と看護－」
臨床リハビリテーションVol.2，No.8，P.672－673，1993年8月

(6) 坪井 良子「大隈重信侯の義足－実存の5本の義足①－」
臨床リハビリテーションVol.2，No.9，P.744－745，1993年9月

(7) 坪井 良子「大隈重信侯の義足－実存の5本の義足②－」
臨床リハビリテーションVol.2，No.10，P.828－829，1993年10月

(8) 保利 清　「義肢に血が通ふまで」
汎洋社　1943年2月

(9) 前田 鑛三「大隈重信候の義足」
日本義肢協会誌Vol.41　P12-13　2000年1月

(10) 白井松器械株式会社　会社案内
(2000年2月入手)

(11) Takechi. H.「History of Prostheses and Ortheses in Japan」
Prosthetics and Orthotics International　1999,16　P.98－103

謝辞

「日本義肢装具史(その1・2)」執筆にあたり吉備総合医療リハビリテーションセンター所長 武智 秀夫先生と山梨医科大学看護学部看護学科教授 坪井 良子先生に色々ご教示頂きましてありがとうございました。また本号(その2)に関し日本義手足製造株式会社社長鈴木貞夫氏に種々ご協力頂きましたことに対し、心からお礼申し上げます。

なお武智先生から日本の義肢装具史に関してはISPO Internationalに英文による紹介があるとのことですので、本号で文献を追加致しました。